

△研究ノート▽

# 江戸の能書家佐々木文山が揮毫した 飯綱町高岡神社所蔵扁額「飯綱大明神」

\* 齋藤 健司

## 一 はじめに

本稿を執筆した令和四年（二〇二二年）から五年にかけては、世界は新型コロナウイルス感染症の蔓延のただ中にあり、ロシアのウクライナ侵攻という大事件も起こった。その後、トルコ・シリアの大地震も起こった。国内では東日本大震災からの復興は道半ばで、台風や大雨による深刻な被害も毎年起きている。しかし、歴史を紐解くと、過去において、先人達は、天災や人災を何度も経験し、その都度乗り越えてきた。日本における江戸時代も然り。何度も台風・地震・火事の災害や、疱瘡・コレラなどの疫病も乗り越えてきたのである。もちろん、現在と異なり、災害等の正確な情報を取得することや、対処法を科学的に導き出すことは不可能であった。そのため、神や仏を祀る神社や寺院は大切であり、人々の拠り所となってきた。それゆえ、地域の人々がそれらを大切に守ってきた歴史がある。長野県飯綱町川上にある高岡神社、その高岡神社の前身でもある夏川飯綱社もわかりである。そして、高岡神社に大切に保存されてきた神号額「飯綱大明神」は、江戸時代中期の武士で、江戸在住の書家、佐々木文山（略称佐文山）（写真①）が揮毫したものである。この扁額は、平成三十年（二〇一八年）十一月二十九日に飯綱町有形文化財に指定されている。

筆者は、二五年ほど前から佐々木文山に関心をもち、調査を始めたが、文山の人物、業績についての本格的な先行研究は管見に入らなかった。そ

の後、独自に文山の業績や書跡を研究し、研究成果を公表してきた。調査を始めると、全国各地、北は岩手県から、南は宮崎県まで、文山の書跡が残っていることがわかり、神社仏閣の扁額が多く、その数は令和五年二月現在、六四面にのぼっている。天災人災などでその後失われ、記録にとどまるものを合わせると一〇〇面以上にのぼる（表①参照）。

筆者は高岡神社「飯綱大明神」扁額の文化財指定に関わった経緯があり、今回、本稿の執筆機会をいただいた。以下、佐々木文山の経歴、人物像、書家としての筆法の特徴について記し、特に扁額の作品事例を取り上げて、飯綱町高岡神社の「飯綱大明神」扁額の製作事情について考えを述べたい。

## 二 佐々木文山の経歴

文山は、万治二年（一六五九年）三月二十三日、江戸の西久保八幡神社（東京都港区虎ノ門五丁目）近くで、先祖に鎌倉時代の武将佐々木三郎盛綱（口伝による）を持つ、佐々木家の子として生まれた。周辺には、高家旗本畠山民部正信や御書院番旗本岡部外記元直の屋敷があった。後に、芝橋近くに住んだ（東京都港区芝四丁目）。なお、居住地が太田蜀山人の著書「一話一言」二には麴町、「東都旧蹟誌」三には西ノ窪とあり、何度か転居した可能性もある。文山の諱は淵龍、字は文山、号は墨華堂、通称は百助といった。享保二十年（一七三五年）五月七日に亡くなった。寛文

十二年（一六七二年）、十三歳で讃岐（香川県）高松藩初代藩主松平頼重に仕官し、江戸で右筆として仕えた。文山が仕えた高松藩の上屋敷は、現在の千代田区飯田橋（上屋敷庭園跡あり）付近だったので、自宅のあった芝橋からは距離としては、およそ七キロメートルで、徒歩で約一時間三分かかる位置にあった。子供は、当初四人（男三人女一人）誕生したが、全員幼少期に亡くなったため、長野氏から嘉武を養子として迎え入れ、宝永六年（一七〇九年）、禄を嘉武に譲り、浪人となった。五十歳の時である。佐々木家は、その後、嘉隆文正・嘉言文深・嘉猷文昌・文淵（一橋家臣河野氏からの養子）・嘉忠文園（儒学者赤井氏からの養子）と明治になるまで、松平家に仕えた。なお、嘉忠は、明治になり、大蔵省官吏となり、キリスト教徒にもなった。また、三代目嘉隆文正は、嘉武が佐々木家の禄を継いだ後に、文山に生まれた子で、嘉武の死後、禄を継いだ。嘉隆は、文山に書の教えをしっかりと受け、書の道を大成したと言われている。嘉隆の書は、現在、文山揮毫の扁額がある群馬県高崎市倉賀野神社に、「八幡宮縁起」として残されている。

文山には兄があり、通称は萬次郎、名は玄龍といい、幕府御家人で、書家として名を成した。玄龍・文山の父は莊太夫相違といい、渡辺源左衛門嘉政の三男で、跡継ぎが無かった佐々木家に娘婿として迎えられた人物であった。慶安から寛文年間にかけて、武蔵忍藩（埼玉県行田市）に、右筆として禄高百二〇石で仕えた。

東京都港区青山霊園に文山の墓がある（写真②）。墓石には文山の人物を評した墓誌が刻まれているので詳しく述べたい。なおこの墓は、もともと上野寛永寺と並び、徳川家の菩提寺で、港区芝にある浄土宗増上寺の子院の一つ浄運院にあったもので、八代目鎌彦が昭和八年（一九三三年）に、玄龍と文山の墓を都立青山霊園に移した。正面（東側）上部の中央に佐々木家の家紋丸に隅立て四つ目紋があり、右から佐々木文山の戒名

「流芳院發誓墨花堂文山居士」、中央に孫の文深の戒名「示現院植誓徳本文深居士」、文深の妻園の戒名「智現院鑑誓貞園信女」が記されている。左側面（南側）から、右側面（北側）まで、ほとんど文山の足跡が記されている。全四三〇字のうち一部を記すと次のようになる。

「先生姓源佐々木氏諱淵龍字文山以字行子世玄龍之弟也性穎敏爽邁弗与物尽幼稚善書長而好学……与兄玄龍齊名夫篆隸楷草師古無忤遊其門者最多簇群侯伯亦随之学矣先生呂万治二年亥三月二十三日辰時生由蚤歲仕官高松侯稟禄修業嘗虛江府私舍矣……宝永六年丑秋先生告老致仕男嘉武継録……先生老益々健而応人所求揮筆不措也享保二十年卯五月七日午時病卒千芝圮之郷享年七十七歳乃墳於三縁山下浄運院之区域……」

現代語訳すると、「源氏の流れを組む佐々木姓で、諱は淵龍、字は文山、書を職業とした。玄龍の弟である。鋭敏な性格で、気性がさっぱりしており、こだわりがなかった。幼少期から、書と勉学に励んだ……。兄玄龍とともに名前が知られ、古代中国の書家を師と仰いで、逆らうことなく篆書、隸書、楷書、草書を書いた。門人となったものは、身分の高い人から庶民まで、最も多く、皆二人に従って書法を学んだ。先生は万治二年亥の年、三月二十二日辰の時に生まれ、若い頃より高松侯に仕え、禄を貰って勤めを果たした。江戸の自宅に住んだ……。宝永六年丑の年秋に、先生は老いを告げて、藩を退官し、息子嘉武が禄を継いだ……。先生は老いても、益々健康で、人々の求めに応じて、惜しむことなく筆を揮った。享保二十年卯の年五月七日午の時、芝橋の郷で、病のため亡くなった。享年七十七歳、三縁山浄運院の区域に墓を建てた。」となる。

この墓誌を考え、記したのは、息子の佐々木嘉隆文正と、兄佐々木玄龍の外孫井上敬治義氏である。なお、佐々木文正が、文学を業としていた井上敬治に詩の制作を願ったのに対して、敬治は偉大な書家の前で、書くのは難しいとしたが、断りきれずに、申し訳程度に詩を書いたと墓誌の中に記して

いる。

### 三 文献に見る佐々木文山についての評価

文山は、広い人間関係を持った人物であった。当時有名な俳諧師宝井其角<sup>かく</sup>との間の逸話として文化元年（一八〇四年）に出版された、山東京伝<sup>さんとうきょうでん</sup>の著書「近世奇跡考」の中に「佐文山の戯書」という話がある<sup>五</sup>。文山が、宝井其角、豪商の紀伊国屋文左衛門と吉原の揚屋に遊びに行った折、揚屋の主人が文山に桜の絵が描かれた屏風を差し出して、賛辞をもとめたところ、文山が「此所小便無用」と書いた。主人が怒りだしたため、其角が「花の山」と付け加えたところ、俳諧一句ができ、主人が大変喜び、屏風を家宝としたという逸話である（写真③）<sup>六</sup>。作者の山東京伝がどのような資料を基に書いたのかわからず、話の真偽は定かではない。後世、この話が広まったことで、文山の酔狂な一面だけが強調されてしまったともいえる。実際は様々な分野の人々と交わりがあり、兄玄龍と同じく御用儒学者林家の「弘文館」に入塾した俳諧師山口素堂や水間沾徳<sup>しみずま せんとく</sup>の作品の序文等の揮毫をし、享保十二年（一七二七年）、高野百里<sup>たかのひやうり</sup>が亡くなった時に墓誌を揮毫している<sup>八</sup>。狩野派の絵師や浮世絵師の英一蝶<sup>へいいつて</sup>等との交流もあり、作品が残されている。また、幕府お抱えの能楽の小鼓方幸氏との交流もある。なお、地方においても、各地の神社仏閣の縁起物や温泉効能の書の揮毫も行っている（表③⑤参照）。埼玉県行田市内の照岩寺の住職が編纂した「泉山景境詩歌集」の住職の文章の揮毫も行っている<sup>九</sup>。江戸後期歌川豊国三代が吉原の遊女を描いた名妓三十六佳撰の中の、遊女「雲井」の浮世絵に次のような文がある。「はいかいを このみ 素外の門に入り また書は 佐々木文山の作をしたひて かい書をよくせり・・・」（写真④）<sup>一〇</sup>。武士でありながら文山は、様々な階層の人にまで影響を与えてきたのである。

文山と同じ時代を生きた人物が残した言葉から、書家としての文山の評価を見てみたい。儒学者荻生徂徠は宝永六年（一七〇九年）九月に記した「佐子号文山説」の中で、文山は、古代中国の思想家、特に「莊子」のものを良く学び、秦の時代に使われてきた、オタマジヤクシの形を使った文字「蝌蚪文」<sup>かとうぶん</sup>が誕生して以降の八体の書体文字を研究し、実践してきたと、評価している。また、文山は、書体文字を指す「文」における「形」と「声（発音）」をしっかりと学ぶことが重要だと考えているとも記している。文山と号を名付けたのは、「文」には、数多くの書体の文字があり、その一つ一つが山のように聳え立っており、何年・何十年と時間をかけて究める必要があり、自戒を込めて「文山」と名付けたとある。そして、文山が、徂徠に「我嘗以墨為土以筆為簣」すなわち、「今まで墨を土と考え、筆を竹籠と考え、山を作ろうと努力してきたが、完成には至っていない、そして、「書経」の「九仞の功を一簣に虧く」を引用して、書道の道がいかに険しいことかと語ったという<sup>一一</sup>。

同じく、儒学者で兄佐々木玄龍と交流があった、松山藩松平家（愛媛県）の儒者大高坂紫山は、その著作「芝山会稿」の中で、「墨華堂記」を記し、秋のある日、文山の庵を訪ねたときの様子を書いている。木々に覆われた静かな場所に、池と庵があり、「墨華堂」という立札があった。文山によれば、「墨華」は、中国古代の能書家王右軍（王羲之）が自宅の長方形をした池で、筆の墨を洗って池が真っ黒になったという故事をもとに、池の水面に墨を垂らすとまるで「墨郷」のような黒い花が浮き出て美しく見えることから「墨華堂」と名付けたという。これがもともとあって、文山の号の名称としても使われたものである。文山は、兄玄龍とともに中国古代の思想や書を良く学び、「六書八體」にも精通していたという。芝山は現在の日本に、文山や玄龍ほど優れた書家はいないと褒めたたえ、文山を「我文明之餘光」と賛辞した<sup>一二</sup>。

更に、江戸の柔術家渋川伴五郎時英は、その著書「薫風雑話」の中で、

文山が、時英の父に対し、「一切の技芸、その事理の趣はかほりなきもの也。貴方などの方にては、劔術などをつかふに、敵を見ると二ツにして置て、扱跡へ太刀刀をやることを修し給ふ。某等が文字を書くも、その意味は同事にて紙に臨むと先ありく」と文字が出来て居る。その跡へ筆をやるのでなければ、誠の能書と云にてはなし」、また、「某は物を書が天職分なれば、とへば味噌屋招牌にても、浄瑠璃本の外題にても、人がたのみさへすれば書てやる也。」など、書に対する考え方や、書の求めに応じる考え方を語っていたと記している<sup>一四</sup>。

つぎに、文山の筆法への世間一般の評価については、簡潔に記すが、幕府御家人で書家の細井広澤が語ったという内容を、息子九阜が安永四年（二七七五年）に書いた「墨道私言」の影響が大きかった。同書には、「佐々木萬次郎（号玄龍）、その弟佐々木百助（号文山）、玄龍門人後藤千二郎（号仲龍）、この三人の書法、朝鮮の筆跡を学びたりという。玄龍自ら伝えらる、我家に孟魯軒と云う唐人の書を蔵したり、それを学びたりと云う、広澤老人評すらく、孟魯軒唐山の人にあらじ、恐らくは朝鮮人なるべし。：：孟魯軒の書を玄龍模したるゆえに、自然と朝鮮の風見ゆるなり、玄龍者流に篆隸なし、たまたま篆隸を見る事あり、皆無法なり、もつとも大かた誤字なり」と記している。すなわち、朝鮮書を会得した佐々木文山や兄玄龍の書は優れていないということであった<sup>一五</sup>。このあと述べるように、佐々木家に伝わった孟魯軒の筆法を朝鮮様としたのは、広澤の誤解であった。昭和一九年に出版された、書家たちの歴史を記した三村竹清（清三郎）の「近世能書伝」は広澤の考えを踏襲していた。そのため、現在の多くの書道の歴史書も同じように記している<sup>一六</sup>。

もうひとつ、文山の評価に誤解を生んだ原因として、兄の玄龍の事績との混同があった。文化十五年（一八一八年）に出版された「本朝古今新増書畫便覧」の文山の項には、「台命ヲ蒙リ朝鮮國ノ答書ヲ作

ル以ッテ朝ニ仕ヘ」とある。更には、安政二年（一八五五年）に出版された「古今墨蹟鑑定便覧 書家之部」には、「兄玄龍ト同シク台命ヲ蒙リ朝鮮國ノ答書ヲ作ル故ヲ以テ兄ハ大府ニ仕フ」とまで記している。また、現代でも、「国書人名辞典」文山の項に「幕命により朝鮮の復書を書す」とある<sup>一七</sup>。しかし、これは、兄玄龍についてだけの話である。玄龍は、正徳元年（一七一一年）六月に幕臣となり、朝鮮国王への返簡書を揮毫している。この大きな間違いの元は、「徳川実紀」の記述にある。六代將軍家宣の「文昭院殿御実紀」、正徳元年六月二十七日の項に、「處士佐々木万次郎淵龍めし出され。稟米二百俵たまはり。御家人に加へらる。これは能書の聞こえありて。文山と號せしものなり。」と書かれている。良く読んでみると、万次郎（玄龍）と文山（淵龍）が混同されて書かれているのである<sup>一八</sup>。実は、この間違いの部分は「御徒歩方万年記」から引用したものである。東京千代田区の国立公文書館の内閣文庫に残る「御徒歩方万年記」には、「寶永八年（正徳元年）六月二十七日の記述に「佐々木万次郎被召出御切米被下置若年寄御支配被仰付之」とあり、さらに朱書きで、「是を号文山とテ手書なり」とある。この「御徒歩方万年記」は寛政九年（一七九七年）以降に編集されたもので、誤って記述したものである。

因みに、同じく内閣文庫にある幕府の日常を綴った「柳營日次記」には、佐々木万次郎の記事はあるが、淵龍・文山という名は全く出てこないのである。文山が幕臣になったというのは事実ではなく、間違いであった<sup>一九</sup>。今後、文山の事績を正しく知るためには、こうした誤りを正してゆく必要がある。

#### 四 佐々木文山の筆法

文山は兄玄龍と共に、父莊太夫から受け継いだ「孟魯軒書法」に基づいて、筆法を展開した。内容は、様々な書体について、筆の握り方や筆の動き等について書き記したものである。筆者所有のものは、玄龍自筆のもの

と、文山のものを門人が書き写したものと二冊ある。文山のものは、表紙には何も記載されていないが、最初の頁には、「孟魯軒書法 増補初学式」とタイトルが書かれている（写真⑤）。ポイントだけ書かれているだけで、説明書きはない。全一六頁の写本で、最後の頁には、「佐々木文山子／写本の写／元禄十二年巳卯五月吉日」と記されている。その内容は、およそ次の通りである。

#### 孟魯軒書法 増補初学式

執筆大概 虚拳実指 去節就肉／一、真去筆頭一寸／一、行去筆頭二寸／一、草去筆頭三寸／一、構筆法 構筆以不測父堅為準 一、握筆法 握筆以不強不弱為準

更に、三腕法、字身藏穎法、筆待足運、真書縦横起筆、大中小体式、三帰法、用筆法、字形法、連綿法、随紙用筆法、染筆法について記している。また、文山の門人南部藩士久慈文眞の写本が岩手県立図書館に残されており、説明書きが細かく記されている。腕の使い方「三腕法」のうち、「提腕真小」については「テイワンハヒチヲカ、ケル也小ハ前ノ一寸心ニテヒチヲカケル也」と「口伝」として記している（写真⑥⑦）。文山の教えは秘伝のものとされ、文山が書いた書法の写本を弟子に与え、説明は口述し、弟子は説明を書き足すというシステムであった。それゆえ、印刷本とはしなかったため、世間に広まることはなく、書法が誤解されることとなった。なお、南部藩の蔵書を所蔵している岩手県立図書館には、孟魯軒書法関連の写本が六冊ある（表②参照）。

孟魯軒は、姓は孟、名は式、字は法安、号は魯軒と言ひ、文人で、中国古代の思想家孟子の子孫といわれる。出身は、中国浙江省杭州武林で、孟子の故郷でもある。明の時代、清の侵略から逃れて日本にやってきて、まず、長門国（山口県）に漂着し、後に安芸国（広島県）に移り住んだという。生没年は不詳である。

実は、孟魯軒と似たような経歴を持つ人物がいる。赤穂浪士四十七士の一人武林隆重（通称唯七）の祖父孟二寛である。元々の名は孟士式といった。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、明の軍医として、朝鮮での戦いに従軍し、長州藩の捕虜として、連れて来られた。長州藩に仕官した後、広島藩に医官として迎えられ、武林治庵と名乗った<sup>二〇</sup>。書にもたけており、正保二年（一六四五年）に、広島県の宮島にある厳島神社に漢詩「写弥山佳景」の書を納め、厳島神社の宝物となっていて、天保十三年（一八四二年）に発行された「厳島名所図会」に掲載されている<sup>二一</sup>。この人の子孫には武林姓と渡辺姓を名乗るものがいた。また、白牛洞孟寛という人物の漢詩の額の額が東京浅草の浅草寺に残されていると、「浅草寺志」に記されている。執筆者の因幡国（鳥取県）若桜藩主だった池田定常は、この人物を、武林唯七の兄であると記した<sup>二二</sup>。

孟魯軒と孟二寛は、同じ「武」の名をもち、長州から広島へ移ったという経歴が共通している。あるいは両者は同一人物ではないだろうか。二寛の子孫には武林姓と渡辺姓があったという。とすると、文山の父莊太夫の生家は渡辺源左衛門であり、文山が孟魯軒の子孫という可能性も考えられる。

江戸時代の書は、寛永の三筆と言われた近衛信尹、本阿弥光悦、松花堂昭乗を代表とする御家流と、林家の門人からのちに幕府の御家人になり、享保四年（一七一九年）の通信使来日時に八代將軍吉宗の回答書の印を篆刻した細井広澤や、その師北島雪山の唐様に大別される。特に、細井広澤の書は、中国の明時代末期に長崎に亡命してきた、黄檗宗の僧即非、独立、愈立德の流れを汲むものであった。文山は、前述したとおり、中国書道の流れを汲む唐様、特に古代の書を大切にしてきたのである。幕臣であった東条琴台の未刊の書「近代著述目錄後編」には、文山の著作として「筆法圖解」、「永字八法辨」、「學書小言」、「文山印譜」が挙げられているが、現在確認されておらず、確認されているのは、唯一太田南畝の写本叢

書「三十幅」所収の「いろは伝」のみである<sup>二三</sup>。また、文山が使用した筆については、詳細は分からないが、墨は、奈良「古梅園」のものを使用した。大きさは不明だが、図柄は、一匹の龍の全身を描き、上部に火炎が描かれている墨である<sup>二四</sup>。

## 五 全国各地に残る文山揮毫の扁額

文山が揮毫した神社仏閣の扁額は、全国各地に六四面あると前述したが、北は岩手県北上市から、南は宮崎県延岡市にある。

扁額はどのように作られたのか。扁額には、蓮の花を模した花先形といわれる形や、雲の形や唐草模様をあしらった栗縁くりのへりと呼ばれる額縁が付いているのが一般的である。多くの人の目に触れるため、豪華に飾られている場合が多い。扁額を製作したのはだれか。江戸時代の物造りは、仕事の分業がかなり進んでおり、宮大工や幕府・大名お抱えの大工などの建設業者は、基本的に扁額をすることはなかった。筆者が目にした限りでは、江戸時代出版された建築指南の本にも記されていない。また、大名家の指南書にも記されていない<sup>二五</sup>。ただ、扁額が後に傷んで、修繕した場合は、地元の大工が担当した。

扁額を作る職業として、「額彫がくほり」があった。元禄時代に書かれた「人倫訓蒙図彙じんりんくもんずい」に、額彫の項目があり、挿絵と仕事の説明書きがある(写真⑧)<sup>二六</sup>。また、金属製の扁額の場合は、「鋳師かぎし」であった。書は、大名家の場合、江戸の藩邸で書かれたので、額も江戸で作られた。なお、額彫として、江戸で当時有名だったのは、「宇田川町 学林がくりん」と「京橋北二丁目 春信はるのぶ」であった<sup>二七</sup>。なお、筆で記した「原書」とともに、多くはトレースして、「籠字かじ(筆文字の輪郭線)」で書いたものを貼って、彫っていったと思われる。

ここで、高岡神社「飯綱大明神」扁額を考える参考にするため、数多くの文山扁額のなから、比較的著名な社寺にあるもの、額の製作された経

緯の記録や伝承があるもの、書体や造りに特徴があるものなど、一〇点を選んで紹介する。

① 宮城県仙台市伊達政宗が眠る霊屋おたまやの瑞鳳殿扁額「瑞鳳殿」(写真⑨)

仙台藩五代藩主伊達吉村よしむらが、伊達政宗百回忌を迎え、霊屋瑞鳳殿の本殿や拝殿の大規模改修を行った際に、本殿には、二代藩主伊達忠宗ただむね揮毫の「瑞鳳殿」扁額があったので、拝殿用に同じ名前のものを文山に依頼したのである。身分差を考えると通常では考えられない大抜擢である。依頼を受けたのは、享保十九年(一七三四年)のことで、文山死去の一年前である。扁額の大きさは縦約七〇センチメートル、横約一〇〇センチメートルで、額縁は雲の形で唐草模様が描かれている。扁額の文字「瑞鳳殿」以外の部分は、右上の閑防印かんぼういんは、恐らく「閑生計かんせいけい」、落款(署名)は、「時七十六歳 佐文山書」で、印は「墨華堂ぼくかどう」である。額を製作したのは、江戸の額彫業者の学林と思われる。理由は、学林が幕府の儒学者林家に係わりがあったからである。残念ながら昭和二十年(一九四五年)戦災で焼失し、現在のものは、昭和五十四年(一九七九年)五月に瑞鳳殿を復元した業者から寄贈されたもので、文山の名等に関わる文字は一切ないが、色模様等忠実に復元されている。赤色の下地は赤サングの粉末を数回塗り重ねたもので、「瑞鳳殿」の白色文字は木彫りの上に真珠の粉末を重ねたものである<sup>二八</sup>。

扁額の費用はどの程度のものであったのだろうか。二〇〇両とも、三〇〇両とも、また五〇〇両とも言われているが、「伊達家史叢談いたてけしそつだん」には、五〇〇両かかったとある。現代の価値に換算し、一両≒五万円として考えると、二千五〇〇万円となる。同書には、「潤筆料トシテ金五百両ヲ贈ラレタルガ、其ノ潤筆料の巨額ナル、当時日本第一ト称セリト云ヒ伝ヘリ、又文山ガ之ヲ揮毫スル為メニ苦心セルコトモ、尋常ナラザリシコトハ、其書損ガ長持二棹ニ充滿セルコトヲ見テモ、想像スルニ余リアリ」と書かれている<sup>二九</sup>。その中で、文山が書き損じた紙が長持二個分になったと書か

れているが、長持一個の大きさは縦横各七五センチメートル、長さ一七四センチメートルの箱型の物である。それが二個分なので、かなりの数と時間を要したことがわかる。更に、伊達吉村の時代の出来事を綴った「獅山公治家記録」の中の享保十九年一月十二日の記録には、「佐々木百助二大字ヲ書シメラルヲ以テ紙布三端披鮭二尾ヲ賜譜フ」とある<sup>三〇</sup>。文山に「瑞鳳殿」文字を書いてもらうために、紙布を三反与え、褒美として鮭のひらきを二匹与えたとある。現在で考えると、反物は、一反の大きさが幅三六センチメートル、長さ一二メートルなので、三反では、長さは三六メートルとなる。鮭は、大きさは七〇センチメートルである。しかし、これは、將軍家に献上するものと同じである。同じく、二月二十八日の記録には、「佐々木文山ニ仙台紬ニ端塩雉二翅大字ヲ書シメラルニ由テ賜フ」とある<sup>三一</sup>。仙台産の紬、恐らく白石紬、一反の大きさは、幅四二センチメートル、長さ一二・五メートル、二反では、長さ二五メートルである。また、鳥の雉を塩漬けたもの、一羽の大きさは約八〇センチメートルである。これらも普段は、將軍家に献上するものであり、かなり優遇していたと思われる。それでも金額は誇張しすぎではないかと思えるが、当時、伊達政宗百回忌の記念であったため、建物を始め、扁額にも高額な費用を費やしたのである。なお、例は一つしか上げられないが、太田蜀山人の著作「竹橋蠹簡」には、宝永三年（一七〇六年）、江戸の湯島聖堂の扁額三面を、京都の公家持明院基輔が揮毫した際、支払った額が「銀一貫八百十一匁」と記されている<sup>三二</sup>。現代の金額では、三面で一五五万円なので、一面は五二万円弱である。「瑞鳳殿」扁額は重ね重ね異例の価格であったことがわかる。なお、政宗百回忌は享保二十年（一七三五年）五月二十四日に政宗創建の瑞巖寺で盛大に行われた。文山が亡くなったのが同じ年の五月七日だったので、文山は扁額の完成を見るのも、百回忌に参列することもできなかつたのである。

② 山形県酒田市心光寺山号扁額「攝取山」（写真⑩）

心光寺は、浄土宗の寺院で、寛文二年（一六六二年）に創建され、出羽松山藩初代藩主の酒井忠恒の庇護を受け、酒井氏の菩提寺となった寺である。寺には、山号の扁額「攝取山」と院号の額「成學院」の二面あるが、山号額は文山の扁額としては、珍しい草書の額である。なお、二面とも修復されたもので、額縁に飾りが無い。

③ 福島県郡山市田村神社扁額「鎮守山」（写真⑪）

田村神社は、古くは、坂上田村麻呂が、建立した鎮守山泰平寺が始まりで、明治になって田村神社となった。江戸時代は、この地域は、守山藩主松平家の管理する領域であった。その間、何度か建物の建設や修復を行っていた。俳諧師松尾芭蕉とその弟子曾良が見学を訪れており、曾良の日記には、元禄二年（一六八九年）四月を訪れて、見学したことが記載されている<sup>三三</sup>。俳諧師との交流があった文山を、曾良は知っていたと思われるが、日記には文山の扁額に関する記述はない。守山藩初代松平頼貞は、徳川水戸家の徳川頼房の孫にあたり、頼貞が文山に「鎮守山」「大元帥」の二つの扁額を依頼したと思われる。「鎮守山」の大きさは、縦七七センチメートル、横一四九センチメートル、書体は楷書、落款は、「佐文山書」、印は「文山」、関防印は「閑生計」である。「大元帥」の大きさは、縦七五センチメートル、横一四七センチメートル、書体は楷書、落款は「佐文山書」、印は「文山」、関防印は「閑生計」である。

④ 埼玉県越谷市大聖寺扁額「真大山」（写真⑫）

大聖寺は、真言宗豊山派の寺で、天平勝宝二年（七五〇年）創建と言われ、越谷市最古の寺である。地元では、大相模不動尊又は大相模のお不動さまと呼ばれて大変親しまれた寺である。徳川家康が関ヶ原の戦いの戦勝祈願に訪れ、宿泊した際に着用した寝衣（寝巻）と刀を奉納している。また、家康は鷹狩の際、度々訪れて、宿泊した。そうした中で、家康から、五〇

石の寺領を与えられた。家康の服や刀は、現在寺に残されており、越谷市の文化財に指定されている。江戸での知名度もあり、何度か江戸で、不動明王の開帳を行っている。

文山の扁額は、現在は、東門に掲げられている。大聖寺の伝承では、正徳五年（一七一五年）に山門が建てられたときに作られ掲げられたが、のち寛政年間に、幕府の老中松平定信が、同じ名称の扁額を揮毫したために、差し替えられたと言われている。文化年間から文政年間にかけて作られた「新編武蔵風土記稿」には、山門（仁王門）の扁額についての記載はなく、「裏門眞大山の額ヲカカク」とあり、これは東門の文山の額をさしている<sup>三四</sup>が、なぜか定信の額には触れていない。

文山の扁額の大きさについては、未調査で、文字は隸書で山号の「眞大山」、落款は「佐文山」、印については、後に修復した可能性があり関防印はなく、落款印は、一つだが、解説できない。額縁は花模様である。一方、松平定信揮毫の扁額は、草書で「眞大山」であるが、「しん」を表す漢字が、文山の「眞」と定信の「真」で異なる。

⑤ 東京都豊島区法明寺鬼子母神堂扁額「鬼子母神」（写真⑬）

法明寺は日蓮宗の寺で、寺の住所は南落合だが、鬼子母神堂は、雑司ヶ谷の飛び地に位置する。このお堂には、江戸時代前期から、將軍・大名が参拝するなど、武家から庶民まで、子育て・安産の神として信仰され、現在まで続いており、多くの参拝者が訪れている。平成二十八年には、国の重要文化財に指定された。お堂は本殿・相の間・拝殿の三つの建築が一体となっている。本殿は寛文四年（一六六四年）広島藩主浅野光晟の正室自昌院満姫が願主となり建立された。相の間と拝殿は元禄十三年（一七〇〇年）に増築された。文山の扁額は拝殿に掲げられている。

扁額の大きさは、縦一四〇センチメートル、横三四九センチメートルと大きなものである。文字は楷書体の「鬼子母神」、落款は「佐文山書」、落

款印は、「墨華堂」、関防印は、「閒生計」である。額縁は、雲と龍が彫られている。面の部分は、紅色の漆が塗られ、文字は、金箔押しである。扁額の裏面には、印刻文字で「元禄十三年庚辰九月吉日」と記されている<sup>三五</sup>。なお、「鬼」の文字の頭に「ノ」がないが、間違いではない。これは、釈迦が夜叉神の娘を改心させ、子育て・安産の神にしたことによるものである。「鬼」ではないのである。それゆえ、菩薩のような像が祀られている。

⑥ 東京都江東区香取神社扁額「大杉殿」（写真⑭）

香取神社は、亀戸香取神社として知られている。天智四年（六六五年）に、藤原鎌足が創建し、香取太神を勧請したといわれている。十世紀、関東の常陸国（茨城県）で平将門が反乱（平将門の乱）を起こしたとき、藤原秀郷（倭藤太）が戦勝祈願に訪れ、勝利したため、弓矢を奉納した。その矢を「勝矢」と呼ぶ。現在は、毎年五月五日に「勝矢祭」として、武者行列が行われている。また、天皇や源頼朝・徳川家康・江戸時代後期の剣豪北辰一刀流の開祖千葉周作などが訪れていたこともあり、スポーツ振興の神社としても知られている。

しかし、この神社は享保期に、特異な歴史を刻んでいる。享保十二年（一七二七年）六月に、境内に「大杉大明神」を祀ったところ、常陸国の阿波大明神の天狗が飛び降りたと噂が出たことで、江戸中に広まり、男女身分も関係なく大勢の人々が祭りでもあったかのように参拝に訪れた。そのため、境内に、連日屋台や練物がでた。この信仰の熱狂さを聞きつけた幕府は、大杉大明神に関わる、信仰そのものや建物等、全てを処分させたのである。心配した人々が水盤や扁額を地中に埋めたため、これらは難を逃れたという<sup>三六</sup>。社殿や信仰は、その後復興されることはなかった。地中に埋められた扁額「大杉殿」を揮毫したのが佐々木文山である。奉納者は不明だが、奉納したのは、享保十二年六月吉日である。現在は神社の宝物館に所蔵されている。大きさは、縦七二センチメートル、横一二〇センチ



チメートル、「大杉殿」の文字は隸書体、落款は「佐文山書」、落款印は「文山」、関防印は「関生計」である。扁額は額縁がなくなっているが、本体は当時のままである。扁額は、現在江東区有形文化財に指定されている。

⑦ 山梨県甲州市恵林寺扁額「雑華世界」(写真⑬)

恵林寺は、臨済宗妙心寺派の寺で、正式には乾徳山恵林寺である。元徳二年(一三三〇年)、地頭職であった二階堂出羽守貞藤が、禅宗の僧夢窓国師を招き、自分の邸宅を禅院として創建したといわれている。永禄七年(一五六四年)には、地元の戦国大名武田信玄が、自ら寺領を寄進し菩提寺と定めた。天正四年(一五七六年)四月、武田勝頼は信玄の盛大な葬儀を行った。天正十年(一五八二年)四月、恵林寺は織田信長の焼き討ちにあい、百人以上の僧侶が亡くなった。その後、徳川家康の手により復興され、徳川五代將軍綱吉の時代に領主となった柳沢美濃守吉保の庇護で発展した。その結果、吉保夫妻の菩提寺にもなった。総門(通称黒門)に掲げられた扁額「雑華世界」は、文山が揮毫したものである。雑華世界とは門をくぐると悟りを開く世界に入るという意味である。扁額は黒地に白色の文字で描かれている。大きさは、未計測であるが、東京の鬼子母神堂の扁額と同じくらい大きいものである。文字の書体は、楷書で、昭和の初めに修復されているためか、文山の落款、落款印、関防印は見受けられない。また、宝物館には、狩野洞元邦信が描いた武田信玄像に文山が賛文を書いた掛軸が残されている(表③参照) 三七〇。

⑧ 長野県岡谷市平福寺扁額「彌陀堂」(写真⑭)

平福寺は、正式には彌林山平福寺といい、真言宗智山派に属する寺院である。地元では、日限地藏尊(通称おひぎりさま)が願い事を託す願かけのお地藏さまとして親しまれている。歴史的には、年代は不明だが、諏訪大社下社にあった神宮寺の僧憲明阿闍梨が開祖と言われている。天正・慶長年間の戦乱・洪水により荒廃し、現在の地に移転した。江戸期には、柴宮正八幡宮

の別当寺として諏訪藩主の帰依を得た。明治元年(一八六八年)の神仏分離令により、諏訪大社の別当寺が廃寺となり、下社神宮寺・秋宮三精寺・春宮観照寺の仏像などを受け継いだ。文山の扁額も、阿彌陀堂とともに、受け継がれたものである。扁額の大きさは、縦六四センチメートル、横一一センチメートル、隸書体の文字、落款は「佐文山書」、落款印は「文山」、関防印はない。近年修復されている。「彌陀堂」の文字は「阿彌陀堂」の「阿」を省略したものである。寺に残る明治元年の別当寺の受け入れ記録には、「彌陀堂地藏堂額面二ツ佐文山筆」とあり、元々は、諏訪大社にあった寺のものであったことがわかる。ただ、「地藏堂」の扁額は、現在不明である。

⑨ 岐阜県高山市櫻山八幡宮扁額「八幡宮」(写真⑮)

櫻山八幡宮は、仁徳天皇の頃に創建され、聖武天皇の時代に、全国に八幡信仰がひろまったことで、確立したといわれている。その後、江戸時代になって、高山領主の金森重頼が社殿を再興し、神領地を寄進した。そして、祭礼の時には、奉行を派遣した。その後、飛騨地域は幕府領となったが、代々の代官が関わってきた。現在、十月に行われる、多くの山車が繰り出される高山祭は有名である。文山揮毫の扁額は、三の鳥居に掲げられている青銅製の物である。大きさは、縦八九センチメートル、横六三センチメートルで、文字は隸書体で「八幡宮」である。落款は「佐文山書」、落款印は「墨華堂」、関防印は不明である。額縁は雲を表しており、穴は猪の耳の形を模している。裏面に、「奉寄進飛騨國高山／八幡之社鳥井并額／飛州御代官／長谷川莊五郎藤原忠崇／享保十五庚戌年三月吉辰／武陽江戸本所住鋳師小林三四郎長利と記されている。代官職の長谷川忠崇が享保十五年(一七三〇年)三月に鳥居と扁額を奉納したとあり、扁額を製作したのは、江戸本所の鋳職人の小林三四郎である」と記されている。長谷川忠崇は、父親の代から代官職にあり、歴史に高い見識があったため、飛騨に居を構えた後、飛騨地方の歴史を題材にした「飛州志」を編纂した。鋳職人は、

幕府傘下の職業人の中に「御鋳師」があった。「享保武鑑」には職業人の名称と氏名が記されている。そこには、住所の「本所」と「小林」という名称はないので、町場の腕利き職人である可能性がある<sup>三八</sup>。また、「寛政重修諸家譜」にも、記載はない。

⑩ 岡山県岡山市妙林寺扁額「妙林寺」(写真⑱)

日蓮宗の妙林寺は、正式には大乘山妙林寺で、通称三門の妙林寺と呼ばれている。江戸時代初期には、鳥取にあったが、大名池田光政(備前岡山初代藩主)が備前に国替えになり、寺も移転してきたのが始まりである。元文元年(一七三六年)に、本堂を始め、多くの建物・門を備えて、現在に至る大規模な寺院である。文山の扁額は、本堂に掲げてあり、大きさは縦一三五センチメートル、横二五五センチメートルの大きなもので、落款は「佐文山」、落款印は「文山」「竹西」の二つ、閑防印は「閑生計」である。落款印の「竹西」は、文山の直筆書には、落款印や閑防印の両方に使われているが、扁額では珍しい。また、「閑生計」は「閑生計」と同じ意味だが、「閑」を使う方が少ない。この扁額の額縁の左側には、「文政壬午年二月再興之／施主佐渡屋五郎兵衛」とあり、右側には、「塗師小笹屋治兵衛」と墨書されている。文政五年(一八二二年)二月に「小笹屋治兵衛」が修復し(塗り直し)、「佐渡屋五郎兵衛」が奉納したと書かれてある。額縁には、修復のためか縁飾りがない。なお、「仁王門」に掲げられた草書の扁額「大乘山」は、五代藩主池田治政揮毫のものである。ここでは、文山揮毫扁額は、そのまま残されたのである。

六 長野県飯綱町高岡神社扁額「飯綱大明神」(写真⑲)とその

製作事情

高岡神社は、明治四十一年(一九〇八年)に、旧高岡村一五社を合祀して、創設されたが、境内は、元々は、夏川村飯綱社のあった場所であ

る。夏川村飯綱社は、中世以前の創建と伝えられ、当時から江戸時代まで、皇足徳命神社と呼ばれてきたが、明治に入り、間違つて飯綱社となつたと伝える。戦国時代、川中島の合戦で、神社の記録等が消失したと伝えられている。徳川時代、延宝年間には、幕府から約五石の土地を拝領している。また、寛永年間には、木製の飯綱大明神御神体が奉納され現存する。別当寺は、修験道(本山派)の寺、三明院(宝蔵院とも言う)であった。三明院は、明治時代以前は、現在の神社近くにあったが、修験道廃止令によつて廃寺となつた。僧たちの墓が近くにある。三明院を指揮下においていたのが、和合院(現在長野市松代にある皆神神社)で、京都の聖護院から、北信地域を統轄するお墨付きをもらい、特に、年行事職として多くの寺を管理した。それほど強い影響力があつたのである<sup>三九</sup>。江戸時代中期までに社殿を含め、参道が整備され、杉の木が植樹された。杉は、平成五年(一九九三)伐採された一本は樹齢三五〇年であつたと言われる。整備には、かなりの資金が必要であつたと考えられ、この地域の領主が関わっていた可能性が高い。また管理する和合院の許可あるいは、報告の義務があつたと考えられ、関わつた組織や人物も、夏川村にとどまらず、広範囲の地域のものであつたのではなからうか。

文山揮毫の扁額の大きさは、縦約七〇センチメートル、横約四〇センチメートルである。扁額は、五つのパーツに分かれ、額縁が四つ、額面が一つで、これらをもつにまとめたものである。額縁は、花先形である。また、魔よけのための「猪目」と言われるハート形の穴が上下に一つずつ、左右に三つずつ花の位置に合わせて彫られている。花先形の端部分が黒く塗られていたと考えられる。ただ、面の部分は色付けされていないかと思われ。この額と同じ作りのものは、他の地域の文山揮毫扁額にはない。額作りを担当した職人の考え方の違いなのだろうか。

文字は、隸書体の「飯綱大明神」で、落款は「佐文山書」、落款印は、「墨

華堂」、関防印は「閑生計」である。漢字の「綱」は多くの地域では「繩」としている。神名の部分は、陽刻で金箔押しをしている。落款、落款印、関防印は陰刻されている。裏面には、草書の朱書きで「信州夏川村小右衛門／発氣奉寄進之／仍武州桜田細野氏／以世話成就畏奉納／享保十三年戊申三月十五日」とある。「信州夏川村の私小右衛門の発起により扁額を寄進させていただきます。なお、武州桜田に住む細野氏が扁額作りの世話をしてくれたことで願いが叶い、奉納させていただきました。享保十三年戊申三月十五日」となる<sup>四〇</sup>。この中で発起人の「小右衛門」であるが、地元夏川村の住人という名乗り以外、どういう人物であるか現在のところ不明である。細野氏については、住所が「武州桜田」とある。場所的には、江戸城下もあれば、現在の埼玉県等を含む武州（武蔵国）の広い範囲も考えられるが、現在「桜田」という地名が残されているのは、埼玉県のさいたま市、久喜市のみで、これは明治時代以降に名づけられたものである。それゆえ、江戸城下の「桜田」ということになる。江戸時代の記録を見ると「武州江戸桜田」「江府桜田」「東都桜田」などと表現されている。「細野氏」がどういう人物かも現在不明である。

扁額の製作に関しては、三点考えられる。一つ目は、「小右衛門」が江戸で文山に書を依頼して、細野氏に扁額の製作を依頼した。二つ目は、元々神社に書が残されていて、それを基に、細野氏に製作を依頼した。三つ目は、以前から、扁額があったが、傷みがあったので、神社の整備をきっかけにして修復を細野氏に依頼したということである。可能性が高いのは、二つ目ではないかと考える。享保十三年当時、文山は七十歳の晩年で、江戸で高名な書家であった。前述した柔術家渋川伴五郎に文山は「人がたのみさへすれば（なんでも）書てやる」と話したとは言いが、社寺の扁額など公に掲げられるものは、そう簡単に引き受けなかったのではないだろうか。また、「小右衛門」が、そうした高名な文山に直接依頼して揮毫料も支払

い、完成したのであれば、「施主（願主）小右衛門」とはつきり記すはずではあるまいか。小右衛門と文山の関係性を示す資料がみあたらない現状では、「小右衛門の発起が細野氏によって成就した」と書いてある意味を、額そのものの製作が完成したと理解したい。それを高岡神社では、人々が長きにわたり、大切に保存していたということである。ちなみに、文山の額の製造や修復を地元の大工に依頼した例は、前述した妙林寺を含めたくさんある。元々あった書から扁額を起こした例は少ないが、山梨県甲州市の三光寺さんこうじの扁額「太子堂」は、文政年間に、当時の住職が、聖徳太子没後千二百年の節目に、太子堂を建設したとあるため、書は既に存在していたことがわかる。また、埼玉県加須市かぞの医王寺にある「薬師堂」扁額についても、お堂自体の建立が安永四年（一七七五年）九月なので、同様である。扁額を奉納したのは、有力な檀家の小山清永こやまきよながで、作ったのは、現在の久喜市の大工又市またいち、時期は、安永七年（一七七八年）正月である。更に、扁額にするつもりで準備した書があったと考えられる例として、兄佐々木玄龍が揮毫した「白山大権現」の書軸が、長野県上田市の戦国武将真田家ゆかりの山家神社やまがじんじやに残されている。上田藩主松平忠周まつだいらただちか奉納の書である。現在、山家神社には「白山大権現」と称する扁額は掲げられていないが、規模的に鳥居等に扁額として掲げるはずのものであったと推測される。

なお、扁額の書を書いてもらい、扁額を作るのに、どれくらいの費用がかかったのか。現在扁額の製作を行っている大阪市浪速区なにわの清和佛具株式会社ががしやの試算によると、一〇六万七千円である。執筆料を前述した公家の例の執筆料五二万円で考えると、合計で一五八万七千円となる。諸経費を付け加えると二〇〇万円近くになるのではないだろうか。個人としては、かなりの出費になる。小右衛門の「発氣」という言葉がかなりの重みをもっていると考ええる。

最後に、全国に数ある文山の扁額のなかで「飯綱大明神」と記したもの

は、私の調査では高岡神社だけである。

## 七 終わりに

佐々木文山が揮毫した高岡神社の「飯綱大明神」扁額の製作事情について、知り得る資料は裏面の銘文のみであり、関係者名等から得られる情報は甚だ乏しく、今回は結論的なことは分からなかった。しかし文山という書家の生きざまや、各地に残る神社仏閣の扁額の情報をあわせて見ることで、当時の「扁額を作るということ」の実態が、多少なりとも分かり、文山揮毫の「飯綱大明神」扁額の製作が、当時の夏川村にとって大事業だったことは認識できた。今後、とくに地元の方にこの扁額に関わる資料の発掘と調査、研究を期待したい。筆者も、今回あらためて文山の門人の作品<sup>四</sup>や交流関係の幅広さなど、未知の部分に気付かされた。更に調査、研究を進めていきたいと強く思う次第である。

扁額には、奉納した人々の思いや、揮毫者の思い、作り手の思い、それを代々保存してきた人々の思いが詰まっている。夏川村の小右衛門が、扁額の裏側に記した「発氣」という言葉が、そのことを強く物語っている。

また、文山の扁額を調べると、江戸と地方の繋がりが見えてきた。扁額は、表示板という実用の役割を果たしているため、傷んだら新しいものを取り換え、古いものは破棄されるものが多く、文化財として保存されることは少ない。しかし、当時の人々が扁額にかけた思いは強かったはずである。今後も、後世に伝えていけるように、地域の人々と共に、守っていくことが望まれる。

## 謝辞

いづな歴史ふれあい館学芸員の小山丈夫様には、扁額の町文化財指定を行うに際して、私をお呼び頂き、また、今回の執筆の機会を与えてくださり、

飯綱町の歴史についても、ご教示を頂きました。文山の子孫の佐々木様には、家系図や過去帳、墓誌の内容をお見せいただき、ご説明とともに扁額に関する資料も頂きました。瑞鳳殿学芸員の渡部治子様には、藩主伊達吉村が、なぜ五〇〇両を出してまで、先祖政宗のために、一介の浪人の文山に揮毫させたのか、裏付けとなる史料やお考えを提供していただき、とても参考になりました。千葉県市川市善照寺<sup>ぜんしょうじ</sup>ご任職の今岡辰雄様には、江戸時代の一墓石の作り方、一度目は土葬、二度目に納骨というやり方をしていただけ、また、墓誌は同じだが、刻まれた名前が、一人二人三人と増えているのは、どのような理由が考えられるのかなどご教授頂きました。そのほか、末尾に記載するように、たくさんの個人や機関から情報や、ご教示を頂きました。誠に有難うございました。感謝申し上げます。

## ◆注

一 江戸後期の歴史学者栗原信充が記した歴代の著名人の肖像を実写した「肖像集三」に描かれた文山の風貌である。文山の肖像とともに、辞世の句が記され、朝顔のつばみに、自分の筆の動きをみせながら話しかけ、つばみはこれから花をさかせるが、自分は老いていくだけだと詠っている。なお、包容力のある顔立ちが描かれているが、他の人物も似たように描き方をしている。画像は、「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧することができる。

二 「日本随筆大成別巻二」（吉川弘文館 昭和五十三年）二三九頁

三 「東都旧蹟誌第一冊」（東京誌料〇二五―四九、東京都立中央図書館所蔵）

四 宝井其角（一六六一年―一七〇七年）は、松尾芭蕉の門人で、「蕉門十哲の一人」として、俳諧の世界で名を馳せた人物。作品集としては、「虚栗」雑談集」等がある。文山と直接関係を示す作品等は見受けられない。

むしろ、其角は、兄玄龍に一目置いていた。ただ、其角と文山は同じ印の「南山白石」を使用していた。筆者は、文山が享保十九年に書いた和漢朗詠集の巻物を所蔵しているが、この印が押されている。

五 「近世奇跡考上」明治刷り筆者蔵「卷之二〇佐文山戯書一丁・二丁」（日本随筆大成第二期第六卷、吉川弘文館、昭和四十九年）

六 浮世絵師尾形月耕（一八五九年～一九二〇年）のシリーズ「日本花図会」の一枚。明治二十九年（一八九六年）発行。筆者蔵。

七 山口素堂（一六四二年～一七一六年）と水間沾徳（一六六二年～一七二六年）は、芭蕉や其角と交流のあった俳人で、佐々木玄龍が儒学を学んでいた林家の弘文館に素堂は元禄六年（一六九三年）、沾徳は元禄七年（一六九四年）に入塾した（東京大学史料編纂所所蔵の林家門人録「升堂記」に記載有り）。兄玄龍と二人が一緒に学んでいたことで、文山と交流できたのである。素堂の俳諧で著名なのは、「目には青葉／山ほととぎす／初鰹」である。

八 高野百里（一六六六年～一七二七年）は、魚問屋を営み、蕉門十哲の一人服部嵐雪の門人であった。息子に盲目の漢詩人高野蘭亭がいる。伊藤蘭洲の「墨水消夏録」（岩本活東子編集「燕石十種」に収録）に、本所の東江寺にある墓の墓誌が記されている。東京葛飾区のと田薬師として有名な、現在の東江寺に墓石はない。大正時代の関東大震災で被災し、寺が本所から東金に移転したためである。子孫の墓もない。住職の話では、寺に残る過去帳に百里の記載はあるが、墓についての詳細はわからないという。

九 利根川沿いにある寺周辺の地域に、八景、十二境を設定して、漢詩と和歌で記した詩歌集。正編が三巻、続編が一卷からなる。享保期前半から作成され、元文年間前半に発行された。全国の公家や大名、住職、武士、女性達のものが載せられている。特に、第二巻には、幕府の御用学

者林大学頭林鳳岡信允や息子信智をはじめ、門下の多くの武士達の漢詩が寄せられている。また、信允は序文も寄せており、住職の竺岩周仙（竺巖）は林家とかなりの交流があったと思われる。詩歌集を製作するにあたり、アドバイスを受けていたと思われる。また、文山が、住職の撰文を隷書で書き記している。享保四年（一七一九年）のことである。また、文山と交流のあった大名伊達吉村や俳人としても知られた大名家世継内藤義英（露沾）の和歌も載せられている。「埼玉県立図書館デジタルライブラリー和歌」で閲覧可能。「新訂増補 埼玉叢書 第五巻」（国書刊行会、昭和四十六年）四九〇頁～五五六頁

一〇 歌川豊国三代歌川国貞、本名角田庄五郎（一七八六年～一八六五年）が描いた、浮世絵版画三六枚のうち一枚で遊女雲井のエピソードを記したものである。「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧可能。筆者蔵。

一一 中国古代に誕生した篆書の一つ。竹簡に漆で文字を書いたとき、漆が粘ったため、点画が太く、先の方が細くなり、その様子がオタマジャクシに似ていることから付けられたと言われている。復刻本「篆書百体千字文」（マール社、平成十九年）

一二 荻生徂徠（一六六六年～一七二八年）は、この文章で、「佐子名襲字淵龍世所稱池庵先生者弟也」と記しているが、玄龍は弟ではなく、兄である。また、玄龍に「先生」と書いているので、書の門人であったかもしれない。現在知られている徂徠の経歴には、書道の話はない。令和三年十二月徂徠の子孫が、東京大学駒場図書館に徂徠の自筆史料百五〇点を寄贈した。図書館に問い合わせをしたが、調査に数年掛かるという話であった。「徂徠集 徂徠集拾遺」（近世儒家文集集成第三巻、ペリカン社、昭和六十二年）。なお、「早稲田大学図書館古典籍データベース」（徂徠集巻之十六）で閲覧できる。

一三 大高坂芝山（一六四九年～一七一三年）は、文章の中で、兄玄龍について、天和二年の朝鮮通信使来聘のとき、通信使の目の前で、「龍」の大きな文字を二種類の書体で書いたのを見て、感激したと書いている。「早稲田大学図書館古典籍データベース」（「芝山会稿六」）で閲覧可能。二人の関係を示すものを二点筆者は所蔵している。一点は、延享年間に写された、芝山が先祖から伝わる琵琶「友千鳥」について書いた文を文山が揮毫したもの。もう一点は、文山が百種類の書体で書いた文字「壽」の巻物に芝山が賛辞を記したものである（表③参照）。なお、愛媛県立図書館に二人の関係について問い合わせしたが、関係を示すものは見つからなかった。

一四 日本随筆大成第二期第十八巻、「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧可能。

一五 「日本書画苑 第一 上巻」（名著刊行会、昭和五十四年）

一六 三村清三郎著「近世能書傳」（二見書房、昭和十九年）、筆者蔵。

一七 「本朝古今新增書画鑑定便覧」版本筆者蔵、「古今墨蹟鑑定便覧 書家の部」（近世人名録集成第四巻、勉強社、昭和五十一年）、「国書人名辞典 第二巻」（岩波書店、平成七年）

一八 「徳川実紀第七輯」（国史大系四十四、吉川弘文館、平成十一年）

一九 このほかに、文山の父相違と兄玄龍が仕官していた武蔵忍藩では、江戸後期に書かれた歴代藩主の事績の記録「公餘録」に、玄龍が父、文山が息子として誤記されている。阿部家史料集「公餘録上」（吉川弘文館、昭和五十年）、川澄次是著「公餘録一」自筆写本（奥州棚倉藩主阿部家文書、学習院大学史料館）

二〇 「NHK歴史ドキュメント⑤吉良を討った中国人三世」（日本放送協会、昭和六十二年）、可児弘明著「孟二寛とその後裔」（「史学」七四巻四号、三田史学会、平成十八年）、同著「孟二寛研究の現状と問題点」（中央義

士会会報五十八号、平成十九年）

二一 「芸州厳島図会上巻」（日本資料刊行会、一九七五年）、「早稲田大学古典籍データベース」（「藝州厳島図会 巻之四」）で閲覧可能。

二二 「浅草寺志上巻」（浅草寺出版部、昭和十四年）、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース 筑波大学図書館所蔵浅草寺志」で閲覧可能。白牛洞孟寛の漢詩の聯の東側は「山頭月影雲光色々無非般若」、西側は「檻外松濤竹浪聲々都入圓通」である。現存しているか不明である。なお、「浅草寺什宝目錄 絵画編」（浅草寺什宝研究会編輯、令和二年）には、記録されていない。また、「三社託宣額」を文山の門人鈴木清文の十三歳の娘が書いて奉納したとある。前述した遊女「雲井」が文山の書に憧れたとあるが、文山は、女性にも門戸を開いていたのかもしれない。因みに、文山のものは隷書の「秋葉大権現」扁額、兄玄龍のものは、篆書「弁財天」扁額があったと記されているが、現存しているか不明である。

二三 東条琴台著「近代著述目録後編」（日本人物情報体系第六十巻学芸編二十、皓星社、平成十二年）、佐々木文山書「伊呂波之傳」筆者蔵、太田南畝著「三十幅」（国書刊行会、大正六年）所収

二四 松尾良樹訳注・解説「古梅園墨譜 古梅園墨譜後編 天卷唐方式」（古梅園、平成五年）一一九頁。古梅園によると文山は高級な墨「龍涎香墨」を使用していたという。墨の名前の由来は、「龍の涎が固まったもの」からきており、龍涎香の実態は、マッコウクジラの腸内の結石だという。

二五 石川重甫著版本「匠家雛形増補初心傳下二」文化九年、「江戸科学古典叢書二十三 大匠／数寄屋工法集」筆者蔵、写本「書禮秘傳式」（岩手県立図書館所蔵）いずれも、鳥居の図を描いた際、扁額の位置を四角で表しているが、作成方法は記されていない。

二六 扁額についての説明があり、「神社仏閣、ソノ名ヲ版面ニ記シ、門  
蘭ノ上或ハ殿堂ノ檐ニ掲グ。是ヲ額ト謂フ」とである。残念ながら、作  
業工程については記されていない。「人倫訓蒙図彙」(東洋文庫五一九、  
平凡社、平成二年)一七六頁。筆者蔵。

二七 「日本国華万葉記卷之七下武蔵野国」元禄十年、筆者蔵。

二八 扁額を調査した図面が残されている。伊達邦宗著「伊達家史叢談」(宮  
城県図書館、平成十三年)九八七〜九八八頁

二九 前掲注二八、九六七頁

三〇 田邊希文著「獅山公治家記録卷一二二」三五頁

三一 前掲注三〇、八三頁

三二 太田南畝編「竹橋蠹簡・竹橋余筆」(竹橋蠹簡卷四、文献出版、平  
成七年)九五〜九六頁

三三 萩原恭男校注「おくのほそ道 付 曾良旅日記・奥細道菅菰抄」(岩  
波文庫、岩波書店、平成三年)

三四 「新編武蔵風土記稿埼玉編下之卷二」(内務省地理局出版、明治十七  
年)五八一頁

三五 昭和五十一年〜五十四年にかけて、「鬼子母神堂昭和の大修理」が  
行われた。その際、扁額も詳細に調査されている。扁額の各部分の形や  
材質、留め金、色、文字の彫り方等細かく調べられている(「都有形文  
化財法明寺鬼子母神堂修理報告書」同修理委員会、昭和五十四年)。現  
在の扁額は、当時のままに再現されている。

三六 斎藤月岑著「増訂武江年表1」(東洋文庫一一六、平凡社、昭和  
五十七年)一二九頁。大杉大明神を祀るといわれる神社は、現在茨城県  
稲敷市にある「大杉神社」で、「あんばさま総本宮」と言われている。  
主祭神は「倭大物主瓊玉大神」である。神社に海や川の安全を守るとさ  
れた大杉を「あんばさま」と呼んだのが始まりである。また、鎌倉時代、

源義経の由来、常陸坊海存が社僧となって天狗となり、各地に舞い降り  
て御利益をもたらせたと言われている。なお、この詳細については大島  
建彦著「アンバ大杉信仰」(岩田書院、一九九八年)が参考になる。

三七 軸絵を寄進したのは、大名戸田忠真である。また、新潟県上越市高  
田の愛宕神社に戦国大名上杉謙信ゆかりの軍配とその箱が残されてい  
るが、当時高田藩の藩主であった戸田忠真が、新しい箱を寄進した際に、  
その説明を箱書したのが文山であった。

三八 「享保武鑑享保十九年」(国文学研究資料館「新日本古典籍総合デー  
タベース」)、横浜国立付属図書館で閲覧可能。

三九 小山丈夫著「高岡神社の前身飯綱社の歴史・秘宝発見」(飯綱町出  
前講座資料、平成二十九年)、いづな歴史ふれあい館編「特別展飯綱  
信仰―羽ばたく飯綱三郎天狗」(同館、平成十八年)、矢野恒雄著「松代  
の修験宗和合院系三明院(宝蔵院)遺跡」(公民館報むれ、平成元年)、  
小林計一郎著「飯綱修験の変遷―五来重監修・鈴木昭英編」(山岳宗教史  
研究叢書九 富士御嶽と中部霊山)(名著出版、昭和五十三年)

四〇 図録「飯綱町の文化財」編集委員会編著「町制15周年記念特別展図  
録 飯綱町の文化財」(飯綱町教育委員会、令和三年)四八頁〜四九頁

四一 文山の門人の中にも、地域に扁額を残した者たちがいる。盛岡藩士  
久慈文眞・猿橋文饒、上山藩士後藤七太夫文鳳・文東親子、相馬藩士脇  
本嘉明、武州葛飾郡の有力者青山文豹などである(表⑥参照)。

#### ◆参考文献

・斎藤健司著「忘れられた書家佐々木文山」(「歴史研究」第五四五号、歴  
史研究会、平成十八年十月)

・斎藤健司著「地方史に名を残す書家佐々木玄龍」(「歴史研究」第五七〇  
号、歴史研究会、平成二十九年四月)

・齋藤健司著「聖廟大成殿の扁額『大成殿』を揮毫した江戸の儒学者・能

書家佐々木玄龍」〔閑谷学校研究〕第二五号（閑谷学校創学三五〇年記念特集号）、公益財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会、令和三年）

◆資料等提供者並びに協力機関

- ・ 佐々木文山の子孫佐々木氏
- ・ 岩手県盛岡市岩手県立図書館
- ・ 同 盛岡天満宮菅公会
- ・ 同 花巻市総合文化センター
- ・ 同 北上市教育委員会
- ・ 宮城県仙台市公益財団法人瑞鳳殿
- ・ 同 七ヶ浜町歴史資料館
- ・ 山形県酒田市松山文化伝承館
- ・ 同 上市教育委員会
- ・ 新潟県上越市教育委員会・上越市立歴史博物館・愛宕神社
- ・ 長野県飯綱町教育委員会・いづな歴史ふれあい館
- ・ 同 箕輪町郷土博物館
- ・ 同 岡谷市真言宗彌林山平福寺
- ・ 山梨県甲府市ホテル談露館
- ・ 同 甲州市教育委員会
- ・ 同 浄土真宗菱浜山三光寺
- ・ 東京都千代田区国立国会図書館
- ・ 同 国立公文書館
- ・ 同 新宿区早稲田大学図書館
- ・ 同 公益社団法人能楽協会
- ・ 同 港区東京都立中央図書館
- ・ 同 豊島区豊島区立郷土資料館
- ・ 同 立川市国文学研究資料館

- ・ 千葉県市川市浄土宗青陽山善照寺
- ・ 岐阜県郡上市歴史資料館
- ・ 同 中津川市苗木遠山史料館
- ・ 大阪市清和佛具株式会社
- ・ 奈良県奈良市古梅園
- ・ 同 吉野町役場産業課
- ・ 岡山県岡山市日蓮宗大乘山妙林寺
- ・ 香川県高松市立中央図書館
- ・ 宮崎県延岡市春日神社

\* 埼玉県加須市



表① 各地に残る佐々木文山揮毫扁額

令和5年2月20日現在 齊藤健司作成

所在地	神社仏閣地	扁額題名	書体	落款	落款印	印首印	縦・横(cm)	奉納者	年代	備考
岩手県北上市	立花里沙門堂	毘沙門堂	隸書	佐文山	文山	関生計	49.5-118	高田立軒武真	享保16年	武真は、盛岡藩士医師
宮城県仙台市	瑞鳳殿	瑞鳳殿	隸書	佐文山書	墨華堂		70-100	仙台藩主伊達吉村	享保19年	1979年復元、旧扁額は「関生計」「墨華堂」印、年齢七十二歳の記載あり
宮城県七ヶ浜町	薬師堂	薬師堂	隸書	文山	墨華堂	関生計	38.7-68			
山形県酒田市	心光寺	撰取山	草書	佐文山	墨華堂、文山	関生計				松山藩酒井家ゆかり、修復
福島県いわき市	龍勝寺	香光殿	隸書	佐文山書			70-180			現在兼務住職
福島県いわき市	長谷寺	慈光殿	楷書							
福島県郡山市	田村神社	大元帥	楷書	佐文山書	文山	関生計	77-149			
群馬県高崎市	倉賀野神社	飯玉大明神	隸書	佐文山書	墨華堂	関生計	74.5-39	金井十兵衛勝精他4名	享保19年	昭和60年頃修復
埼玉県深谷市	瑠璃光寺	深谷山	篆書	佐文山						深谷市指定文化財、修復
埼玉県深谷市	榎山神社	熊野三社大権現	隸書	佐文山書						深谷市指定文化財(瑠璃光寺が別当寺)
埼玉県熊谷市	大寄八幡大神社	正一位御霊宮	楷書	佐文山書	換齋堂	太平陀				篆書 武江頼林 河室門入敬彫
埼玉県熊谷市	個人宅	薬師堂	隸書	佐文山	換齋堂	人生桑				旧清安寺のものを個人宅で所蔵
埼玉県行田市	天洲寺	太子堂	隸書	文山	文山	関生計		忍藩主阿部正喬	正徳2年	修復、施主小山清永、安永7年正月吉日戸ヶ崎村大工文市作之とあり
埼玉県加須市	医王寺	薬師堂	隸書	文山	墨華堂	関生計		旗本安藤要定		
埼玉県加須市	白山神社	浅間太神	行書	文山敬書						旗本大岡土佐守政春が神社創建に際し、奉納
埼玉県加須市	諏訪神社	正一位諏訪大明神	楷書	佐文山書						旗本大岡土佐守政春が神社創建に際し、奉納
埼玉県毛呂山町	出雲伊波井神社	八幡宮	隸書	佐文山書	墨華堂	関生計	89-56.8	嶋田太良左右衛門	享保9年	毛呂山町指定文化財
埼玉県越谷市	大聖寺	真天山	隸書	佐文山					正徳5年	元々は総門に掲げられていたが、松平定信の扁額ができたため、奥門に掲げられたと言われている。
埼玉県越谷市	安国寺	大龍山	隸書	佐文山	文山					修復
埼玉県さいたま市	多聞院	持寶山	隸書	佐文山署	墨華堂					修復
千葉県印西市	松虫寺	摩尼珠山	隸書	佐文山			31-84		享保3年	
千葉県いすみ市	鶴沼神社	神明宮	隸書	佐文山書	墨華堂	関生計	75-56.5	丸氏敬掲	享保14年	いすみ市指定文化財
東京都江東区亀井戸	香取神社	大杉殿	隸書	佐文山書	文山	関生計	71.5-120		享保12年	江東区指定文化財
東京都豊島区雑司ヶ谷	法明寺鬼子母神堂	鬼子母神	隸書	佐文山書	墨華堂	関生計	349-140		元禄13年	修復、漢字「鬼」の「リ」が無し
東京都新宿区高田馬場	諏訪神社	諏訪宮	隸書	佐文山書						修復
東京都葛飾区小菅	蓮昌寺	七面堂	隸書	佐文山書						
神奈川県横浜市	燈明寺	燈明寺	隸書	佐文山書						
神奈川県厚木市	東光寺	薬師堂	隸書	文山	墨華堂	関生計		長兵衛		
神奈川県厚木市	長福寺	長福寺	隸書	佐文山	文山	関生計		馬場権右衛門他24名	享保9年	

神奈川県厚木市	妻田薬師	薬師堂	隷書	佐文山書	墨華堂								
神奈川県鎌倉市	安国論寺	安国法窟	隷書	佐文山書	文山	閑生計							修復
神奈川県平塚市	駒形神社	駒形大権現	隷書	佐文山書	文山								右に「相州大住郡丸嶋邑鎮座」と刻字
神奈川県松田町	桜観音	観音堂	隷書	佐文山書	文山	閑生計							
神奈川県松田町	延命寺	観音堂	隷書	佐文山書	墨華堂、文山	97-210							
長野県飯綱町	高岡神社	飯綱大明神	隷書	佐文山書	墨華堂	閑生計	69.5-42.0	夏川村小右衛門	享保13年				世話人武州桜田細野氏、旧夏川飯綱社蔵、飯綱町指定文化財
長野県上田市	大神宮社	大神宮	隷書	佐文山									
長野県諏訪市	法光寺	地藏堂	隷書	佐文山	文山								
長野県岡谷市	平福寺	彌陀堂	隷書	佐文山書	文山	閑生計	63.5-121.0						諏訪大社下社秋宮別当旧三精寺阿弥陀堂扁額、平成18年修復
長野県箕輪町	長岡神社	八幡宮	隷書	佐文山書	墨華堂	閑生計	71-45						レブリカ、裏面に奉納平成5年正月作建具師中林一幸
長野県箕輪町	無量寺阿弥陀堂	西光山	隷書	佐文山書	墨華堂	閑生計	74-48						
長野県箕輪町	小河内神社	八幡宮	隷書	佐文山書	墨華堂	閑生計	79-52						
山梨県甲州市	恵林寺	雑華世界	楷書	佐文山書			67-40.5						読み「そうかせかい」
山梨県甲州市	三光寺	太子堂	楷書	文山	墨華堂	閑生計							文政5年に当時の住職「永因聖」が奉納
新潟県糸魚川市	能生白山神社	白山大権現 弁財天	隷書	佐文山書 佐文山書	墨華堂 文山・南山白石	閑生計 閑生計	99-65 79-52	西本五右衛門尉 松平河内守内高城安能	享保15年 享保15年				修復、能生の北前船主、豪商 修復、室井其角の印に「南山白石」四角印あり
静岡県掛川市	天神社	天満宮	隷書	佐文山書			83.5-55						青銅製、二の鳥居扁額
岐阜県高山市	桜山八幡宮	八幡宮	隷書	佐文山	文山	閑生計	89-63	飛騨代官長谷川忠崇	享保15年				旧粥川寺所蔵、「粥川氏光撰」と裏書あり
岐阜県郡上八幡市	星宮神社	高賀山	隷書	佐文山書		閑生計	69-122		享保13年				
岐阜県郡上八幡市	熊野神社	熊野大権現	隷書	佐文山書		閑生計	89-55						
京都府綾部市	赤国神社	正一位赤國神社	楷書	佐文山	文山	閑生計							
京都府京丹後市	住吉神社	住吉大明神	隷書	佐文山書	墨華堂	閑生計							
奈良県吉野町	桜木神社	櫻木宮	楷書	佐文山書	文山	閑生計							
奈良県高市郡高取町	子嶋寺	観學寺	楷書	佐文山書									
岡山県備前市	正栄寺	正栄寺	隷書	佐文山書	墨華堂	閑生計	62.8-134	南条八郎正修	元禄13年				熊沢瀧庵の子、原書が2種類あり「寺」の字2種類
岡山県備前市	福生寺	大瀧山	隷書	佐文山書			60-117.5		宝永6年				
岡山県倉敷市	宝泉寺	観音堂	隷書	佐文山	文山・墨華堂	閑生軒	90-180	地本有志	宝永5年				倉敷市指定文化財
岡山県岡山市北区	妙林寺	妙林寺	楷書	佐文山	文山・竹西	閑生計	135-255						扁額左縁 文政五年十二月再興之 施主佐渡屋五郎兵衛の印刻墨書、扁額右縁 委師 小世屋治兵衛
岡山県浅口市	大蔵神社	大蔵天神宮	楷書	佐文山書	墨華堂	閑生計	99-55						
広島県三次市	太蔵神社	太蔵宮	楷書	佐文山書	文山								
宮崎県延岡市	春日神社	春日大明神	隷書	佐文山書	文山								丸印の「文山」の文字は、平塚市駒形神社と同じ
宮崎県延岡市	三輪神社	三輪大明神	隷書	佐文山書	墨華堂		82-52.5						

所在地	所蔵場所	タイトル	形態	写本者	年代	丁数	縦・横(cm)	備考
埼玉県加須市	筆者蔵	孟魯軒書法 (増補初学式)	写本			11丁	27 5-20	元禄12年巳卯5月吉日、佐々木文山子、写本之写、桂利廣信書
		孟魯軒書法 (増補初学式)	写本	長嶺九郎治	嘉永2年	14丁		長嶺は盛岡藩士、孟魯軒書法あり
		孟魯軒書法 (増補初学式)	写本	南部利謹	安永3年	10丁		南部利謹、9代盛岡藩主利雄長男
		孟魯軒書法 (増補初学式)	写本	久慈文真		16丁		久慈は盛岡藩士、玄龍弟文山の門人
岩手県盛岡市	岩手県立図書館	孟魯軒書法	写本			6丁		
		孟魯軒略筆法 点形図抄	写本	佐々木玄龍	寛文10年	14丁		玄龍が「長順」名の人物に授けたもので、自筆本の可能性あり
		孟魯軒書法 (増補初学式)	写本	小野貞義	天保4年	26丁		

所在地	所蔵場所	形態	タイトル	年代	縦(cm)	横(cm)	備考
埼玉県加須市	筆者蔵	書幅	慎其獨		34.5	51	儒教「大学」の一節
		卷子	西湖(十景)	元禄15年	30	920	漢詩之和歌
		卷子	百寿図		32	470	序文 大高坂芝山落款「芝山」「喬松」、佐々木文山印「左文山」「竹西」 藩主戸田忠真撰文を揮毫、元禄16年
新潟県上越市	愛宕神社	箱書き					関防印「竹西」、落款印「墨華堂」(筆者寄贈)
埼玉県行田市	行田市郷土博物館	書幅	天照皇太神				
東京都港区	大倉集古館	卷子	瀟湘八景書体	享保5年			
山梨県甲府市	ホテル談露館	紙本	談露		28	50	
山梨県甲州市	恵林寺 武田信玄公宝物館	画幅	武田信玄像図				狩野洞元邦信画、賛文山書大名戸田忠真の奉納

所在地	所蔵場所	形態	タイトル	年代	縦(cm)	横(cm)	備考
埼玉県さいたま市	氷川神社	標石	武蔵國一宮	享保7年	301	136	角柱型
静岡県富士市	称念寺	標石	「前富士」「称念寺」2基	正徳5年7月1日			角柱型 施主鈴木治右衛門 碑文あり

所在地	所蔵場所	形態	タイトル	年代	直径(cm)	高さ(cm)	備考
埼玉県加須市	筆者蔵	銅製花器		享保15年9月吉日	11	30	「享保十五庚戌年九月之吉/幸五郎次郎正方敬奉/佐々木文山書」とある。五郎次郎正方は能楽小鼓方幸氏10世

表⑥ 佐々木文山門人の揮毫扁額

所在地	神社仏閣地	扁額の名称	書体	落款4	落款印	印首印	縦・横(cm)	奉納者	年代	門人名
岩手県盛岡市	盛岡天満宮	天満宮	楷書							盛岡藩士「久慈喜八郎(文真)」, 天満宮が2面あり
岩手県花巻市	早池峰神社	白髪大明神	隸書	文隸書		筆花堂	53-102	久慈文真他	享保19年	盛岡藩士「猿橋野右衛門(文隸)」
岩手県花巻市	大迫郷土文化保存伝習館	妙泉池生寺	隸書				89-183	久慈文真他	享保19年	盛岡藩士「猿橋野右衛門(文隸)」
岩手県花巻市	妙琳寺	妙琳寺	行書	東皐文真書						盛岡藩士「久慈喜八郎(文真)」
山形県上山市	称念寺	称念寺	隸書	文鳳書			70-110			上山藩士「後藤文鳳」
山形県上山市	称念寺	一聲山	行書				70-110			上山藩士「後藤文鳳」
山形県上山市	宮脇八幡宮	正八幡宮	隸書				110-70			上山藩士「後藤文鳳」
千葉県市川市	善照寺	青陽山	行書	青文豹書						有力農民「青山文豹」



写真②  
佐々木文山の墓



写真①  
佐々木文山の肖像  
(国立国会図書館デジタルコレクション)



写真⑤  
「孟魯軒書法 増補初学式」  
佐々木文山門人の写本



写真④  
名妓三十六佳撰「雲井」



写真③  
「佐文山の戯書」



写真⑧  
「人倫訓蒙図彙」より「額彫」



写真⑦  
「孟魯軒書法 増補初学式」(写真⑥は⑤と同書)  
(写真⑦は久慈文眞写本、岩手県立図書館提供)



写真⑥



写真⑨  
宮城県仙台市瑞鳳殿拜殿扁額  
「瑞鳳殿」  
(戦災で焼失する前の古写真  
：瑞鳳殿提供)



写真⑩  
山形県酒田市中心光寺扁額  
「攝取山」  
(酒井市松山文化伝承館提供)



写真⑪  
福島県郡山市田村神社扁額  
「鎮守山」



写真⑫  
埼玉県越谷市大聖寺扁額  
「真大山」



写真⑬  
東京都豊島区法明寺鬼子母神堂扁額  
「鬼子母神」



写真⑭  
東京都江東区香取神社扁額  
「大杉殿」



写真⑮  
山梨県甲州市恵林寺扁額  
「雜華世界」



写真⑯  
長野県岡谷市平福寺扁額  
「彌陀堂」  
(平福寺提供)



写真⑱  
岡山県岡山市妙林寺扁額  
「妙林寺」  
(妙林寺提供)



写真⑰  
岐阜県高山市櫻山八幡宮扁額  
「八幡宮」



写真⑲  
長野県飯綱町高岡神社扁額  
「飯綱大明神」  
(飯綱町教育委員会提供)

(提供記載のない写真は全て筆者撮影)